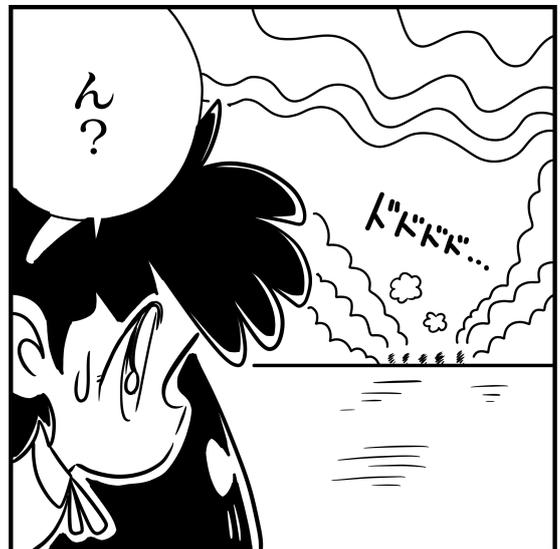


まんが三河白道

わたし
私 は みかん
き が つ け ば
ひろい 荒野 に
わたし ひとり
私 一 人 だ け

ここは
一体どこ
……？

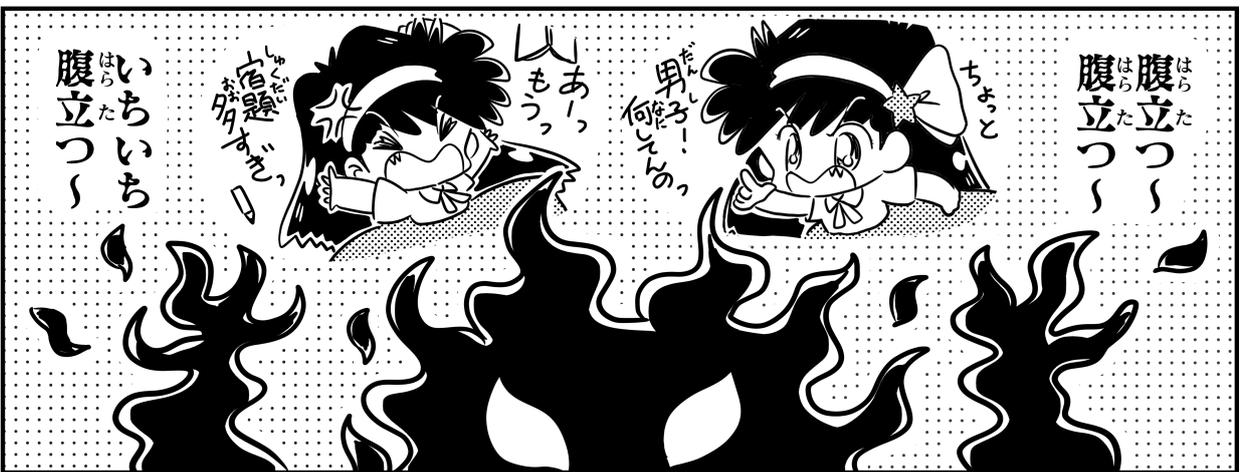
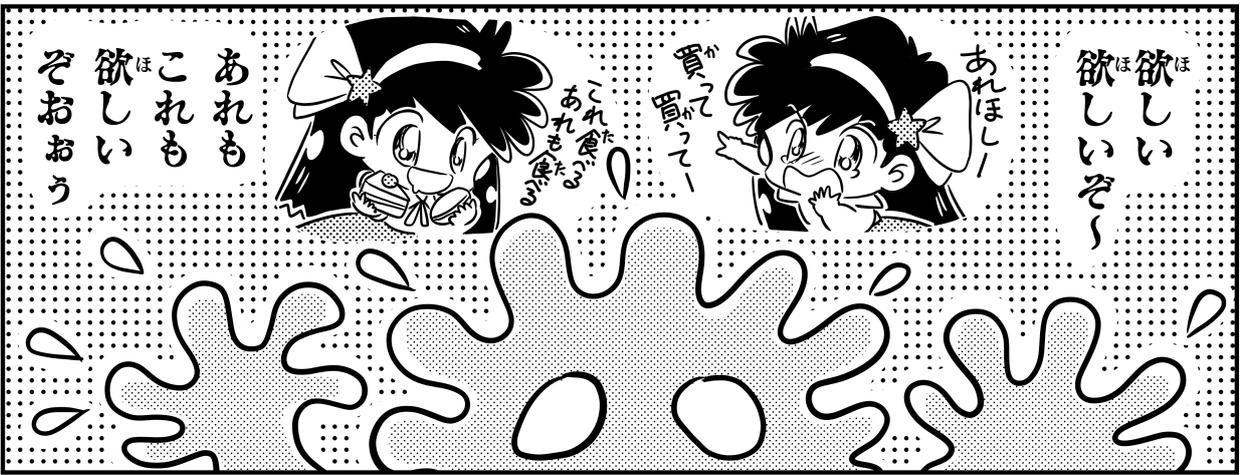
※一人だけ …… まだ阿弥陀様のことを教えてくれる人に出遇えていない状態（仏教は遇い難し）



ドドドド
ガクク

ドドドド…

※群賊悪獣が追いかけてくる … この凡夫の世界は常に煩惱によって悩まされている



つまり
おれたちは
おまえの
煩惱やで〜

ずっと
仲良く
しようぜっ

おま
思い当たるこ
多すぎて
返せない

…何なの
こいつら…



あれ?
人間もいる?

ドドドドド
あーほほほ

な…なに?
あの
あやしい人
…それに
お坊さん?

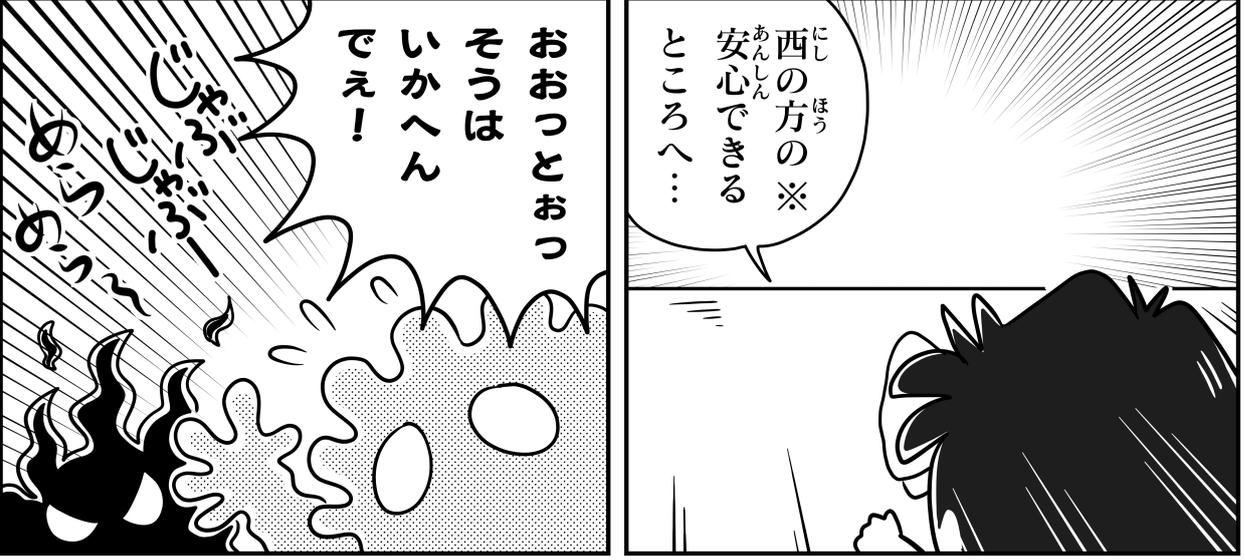


…とにかく
ここに
いたら
ヤバい気が
するわ
早く
逃げないと



にし
西の方の※
あんしん
安心できる
ところへ…

おおつとおつ
そうは
いかへん
でえ!



※西の世界へ … 本当に安心できる世界、如来様のお浄土の世界へ

※水火二河が立ちはだかる：
如来様の国へは、私たちの煩惱の心では往くことはできない



あ…真ん中に
白い道があるわ
…これを進めば…



な…なんだか
細くて
たよらない道ね…
※



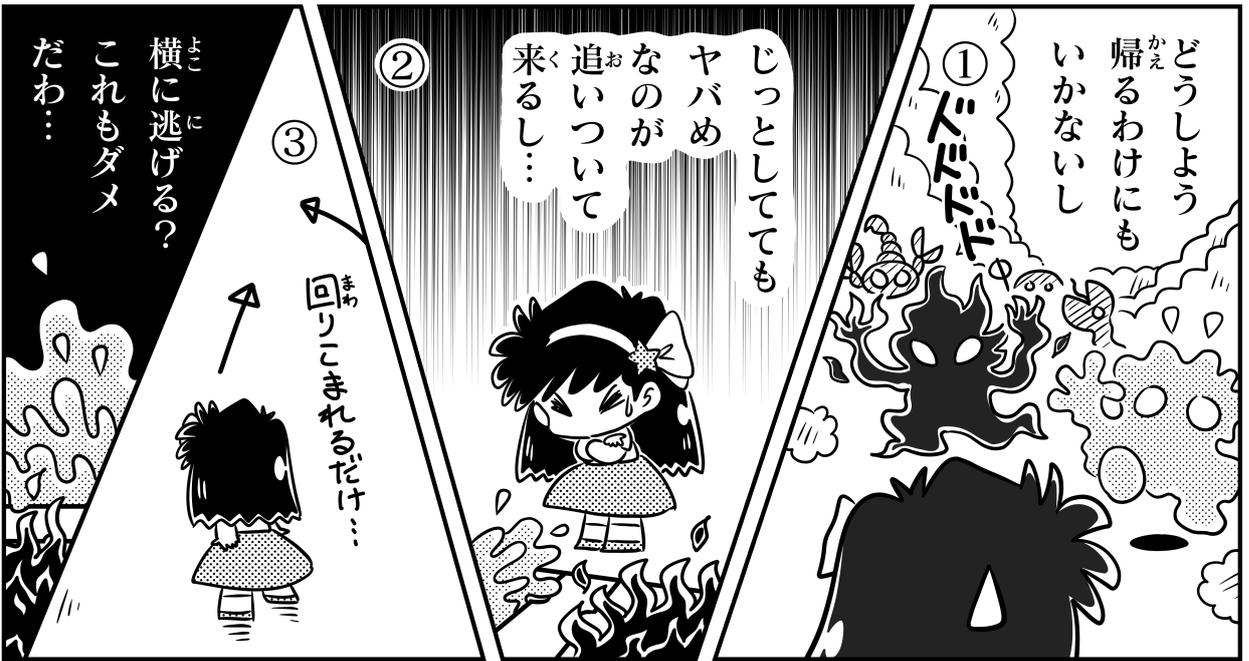
※自力の白道 … 水火の煩惱は常に激しく、

どうしよう
帰るわけにも
いかないし

じっとしてても

ヤバめ
なの
追いついて
来るし…

横に逃げる？
これもダメ
だわ…

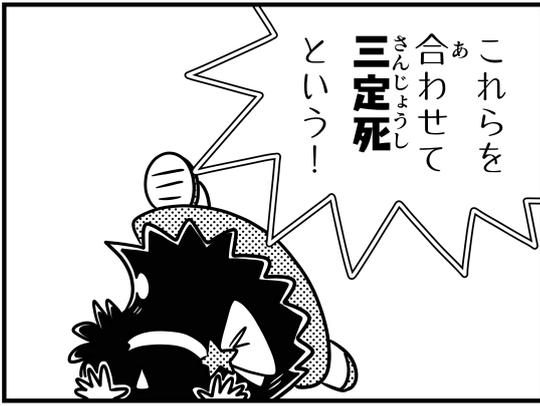
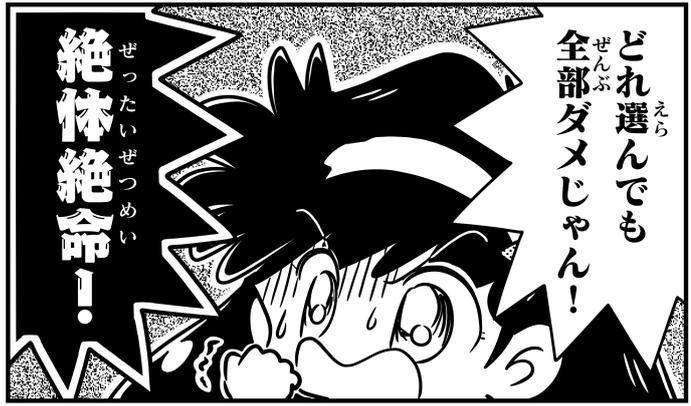


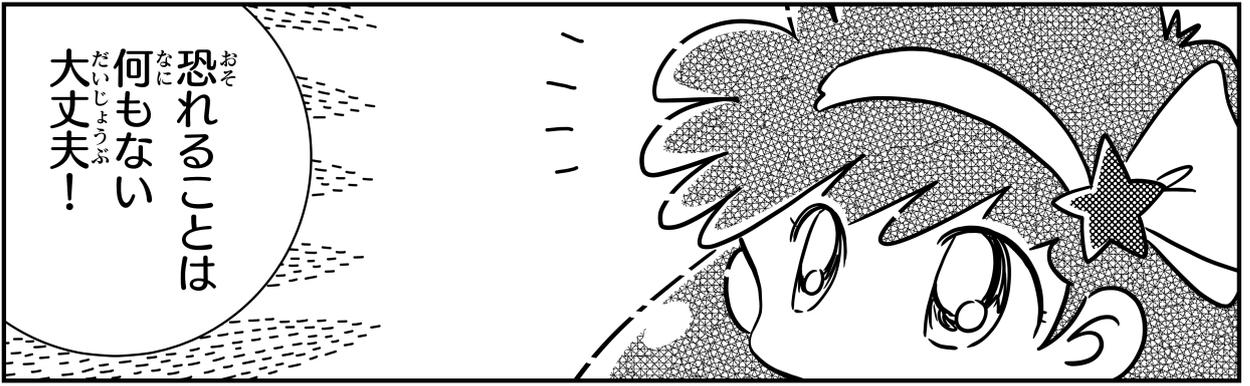
この道を進むと
水や火の中に
落っこちそう…



自力の修行の道は細くたよらない

※凡夫の決断：自力の確信は常に不安（疑い）と表裏一体、自力で固める信心は定まることがない

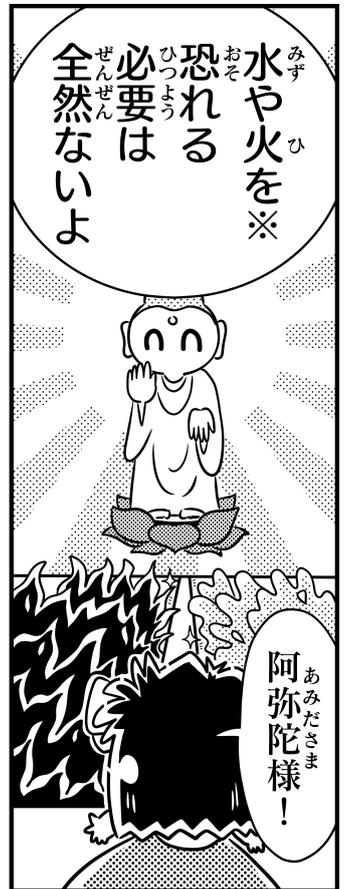




※阿弥様に会う
あみださまにあう
…

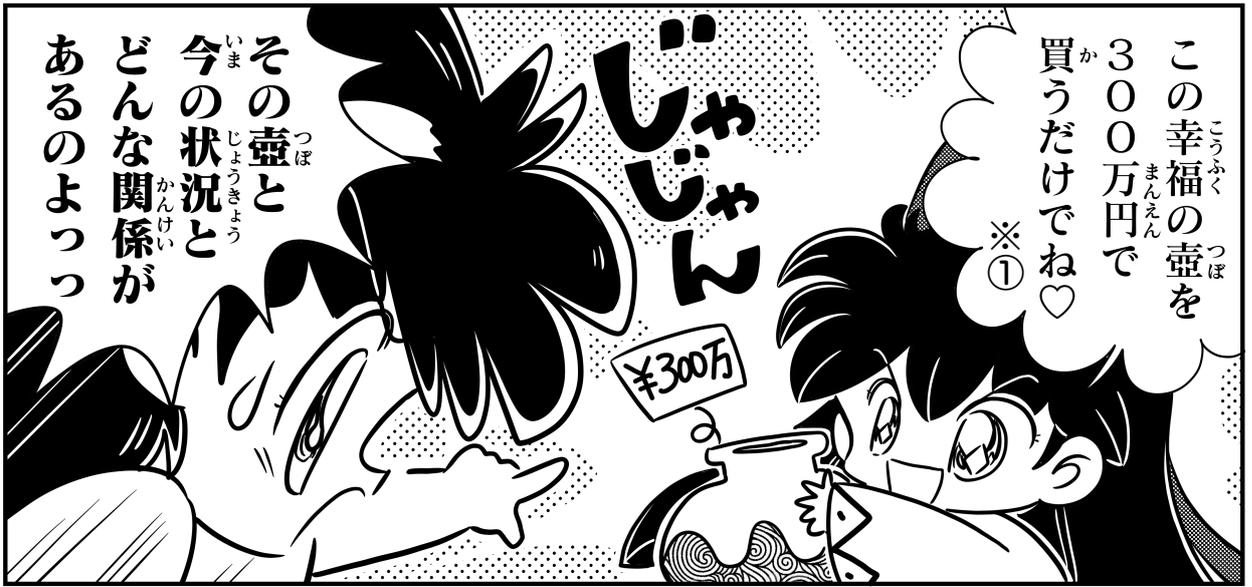


お釈迦様のお経に説かれた本願のお意を聞く(自分を見つめるのではなく本願を聞け)
しやくあさまのおきょうにせつかれたほんがんのおいをきく(おれをみつめるのではなくほんがんをきけ)



※他力の白道 : 阿弥陀様に護られて、煩惱のあるままで阿弥陀様のお浄土へ





※他の宗教からの妨害 : ①欲の宗教 (迷信や神だのみなど)



②自力修行の宗教 (理論も実践も難しい)



※何ごとも安心がならないこの世で、浄土往生だけは安心させて頂ける、そしてお浄土は全てが安心の世界



あなたの
言ってることは
全部
間違ってるわ！

安心の心は
自分で作るもの
じゃなくって
如来様から
頂くものなのよ！



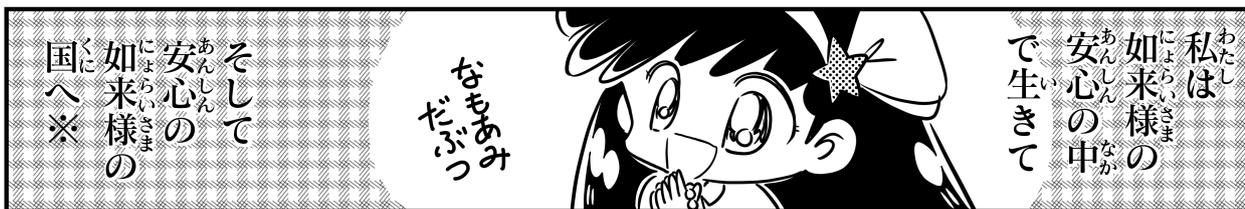
間違いないのは
如来様だけ
だものね♡

そうそう

そうそう

だめじゃー
行くな

ねえ
300円
どう？



私は
如来様の
安心の中
で生きて

なまのみ
だぶつ

そして
安心の
如来様の
国へ※



そこには
先に往った
おじいちゃんも
おばあちゃんも
いる…
私は寂しくない

仏の子は
幸せなのよ※

Fin

なまのみ
だぶつ

※※昭和天皇様のお言葉

「因通寺には洗心寮せんしんりょうという引揚孤児の寮がありました。

戦争孤児や引揚者の境遇を気にかけておられた昭和天皇は、佐賀県で最初の御巡幸先にここを望まれたのでした。

：

やがて陛下は引き込まれるようにして、陛下を待ち申している三人の真ん中の女の子に話しかけられました。

見ると、女の子が手にしていたのは位牌でした。

「お父さん、お母さん？」

陛下は話しかけます。

位牌は二つでした。

「はい、これが父と母です」と女の子は答えます。

「どこで？」

「父は、ソ満国境で名誉の戦死を遂げました。

母は、引揚の途中で病のため亡くなりました」

「お淋しい？」

女の子は首を横に振って口元を引き締めました。

「いいえ、淋しくありません。私は仏さまの子どもですから」

陛下は少し驚いて女の子の目を見つめたが、女の子はひるまずに続けました。

「仏さまの子は父にも母にも、お浄土でもう一度会えるんです。だから父や母に会いたくなったら、私は仏さまに手を合わせます。

そして、父と母の名前を呼ぶんです。すると父も母も私のそばにやってきて、私をそっと抱いてくれるんです。私は淋しくありません。私は、仏の子です」

陛下は女の子をしばらく見つめたあと、部屋に入り右手の帽子を左手に持ち替え、空けた右手で女の子の頭をゆつくり時間をかけて撫でつつ、なおも話しかけました。

「仏の子どもはお幸せね、これからも立派に育ってくださいね」

と言うなり、畳の上に大粒の涙が一つ二つ雫れ落ち・・・ました。」

(因通寺いんつうじ住職の調寛雅(しらべかんが)氏の著書「天皇さまが泣いてござった」より)

(以上 web「戦争を語り継ぐ集い・かごしま」より)